

平成29年度 学校だより



平成29年11月14日(火)  
御前崎市立第一小学校

学校教育目標

花いっぱい 自分 友だち 御一小

No.7

E-mail:

onichi@ed.city.omazaki.shizuoka.jp

## 学びほぐし

あなたは「勉強」という言葉を聞くとどんなことが頭に浮かびますか。「勉強」という漢字は、「勉めて強いる」と書きます。「強いる」とは無理に押しつけることです。だから、勉強は「我慢して、無理にやらなければならないもの」という考えが根底にはあります。でも、本当にそうでしょうか。小さい子どもの頃は「よく遊べ、よく学べ」と言われます。ところがこの「遊び」のとらえ方が、年齢が進んでいくにつれて変わってくるように思います。

「学び」という言葉には、自ら進んで行うものとする考え方があります。自ら進んで言えば「遊び」も同じです。幼児期においては、遊びそのものが学びです。みんなと砂遊びをしている時には、社会性や創造力が育まれています。ところが、小学校から国語や算数などの教科学習が始まるようになると、何だか「遊び」は「勉強」と反対にあるもののように扱われ始めます。「遊んでばかりいないで勉強をしろ」となどの激が親からとぶようになります。遊びは気晴らしであり、だらしないというような扱いを受けるようになります。学びが「遊び」と「勉強」に分けられて柔軟性のない固いものになってきます。

私たちは、知識は「与えられて得る」と思い込まされてきたような気がします。勉強は「遊び」の反対語で、「学び－遊び＝勉強」という公式を当たり前のように思い込んでいました。本来、学びはおもしろく、学校だけに限定されないことを知っているはずなのに、いつしか大人は「勉強」というものに縛られています。心身共に固くなり始めている大人は、今まさに必要なのは変な公式にとらわれない「学びほぐし」ではないでしょうか。

まずは、大人である私たちが、型どおりの経験を解きほぐすように、「学びほぐし」が必要です。そのためには、子どもと接して、「今まで当たり前だと思っていたことが、当たり前でなかったことに気づく」ことが大切です。子どもが出合ったものごとに対して目をキラキラ輝やかさせ、学んぶことを楽しんでいる姿に寄り添うことです。子どもの特性を知ること、子どもの力を信じることがあってはじめて子育てが始まるのだと思います。



学び－遊び＝勉強？



(文責：竹原一人)